は、乳歯列完成後から徐々に減少を続けた。
考察：下顎骨の発育は、摂食開始や咬合の増大に必要
要な臼歯の萌出期と大きく関与しているものと思われ
た。また、下顎骨の前方部の発育には、長管骨の発
育と同様、視覚化骨の増大が示唆され、それが臼歯萌
出期の確保に必要なものと考えられた。
結論：下顎の発育には、大きな咀嚼力が必要な時期、
すなわち環境要因の関与が示唆された。

演題4 最近4年間に当科を受診した頜機能異常者の
調査
○佐々木幸光、池田代子、村内清孝、
藤澤政紀、東海林理、田村寛二
岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座
同歯科放射線学講座

目的：当講座では頜機能異常者の調査をこれまで継続
して報告してきた。今回は、最近4年間における頜機能
異常者の初診時の症状と頜関節部MR所見、ならび
にVisual Analogue Scale（VAS）による主観的状態
評価結果との関連について分析した。
調査対象：1999年1月から2002年12月までの4年間
に、岩手医科大学歯学部附属病院第二補綴科において
頜機能異常と診断された患者286例（女性205名、男性
81名、平均年齢39.8±16.4歳）の初診時における病態を
調査した。
結果と考察：男女比、年齢分布、主訴、初発症状、誘
発因子、初発症状から期間、関連症状については前提
回の報告とほぼ同様の結果であった。一方、来院経路
では院外歯科からの紹介が44%と前回の32%に対し増
加し、当科における紹介患者の受け入れ体制が定着し
てきたことがかかった。MR所見と症状との関係を
調べたところ、側方開関節に疼痛を訴えた患者で側方
転位が認められたケースは53%であり、片側開関節部
に疼痛を訴えた患者の症状状に転位を認めたものは
31%にとどまり、円板転位と症状が必ずしも一致しな
かった。疼痛を主訴としていたが否かにより疼痛群と
疼痛なし群に分け、VASを用いた日常生活障害度、自
発痛、咀嚼時痛み、開口時痛みの関連を分析したところ、
両群間に有意差が認められた（Mann-Whitney
U-test：P<0.05）。初発症状から来院まで期間を
2ヶ月未満、2ヶ月以上から1年未満、1年以上の3
群に分けしVAS値を比較したところ、咀嚼時痛と開
口時痛に2ヶ月未満と1年以上の間に有意差が認め
られた（Scheffe's F-test；P<0.05）。初発症状からの
2ヶ月未満の群では77%が疼痛を主訴としているのに
対し、1年以上経過した群では56%とひらがきがあるこ
とが、VASの結果にも反映されたと考えられる。
結論：紹介受診するケースが増え、当科における紹介
患者の受け入れ体制が定着してきた。頜機能異常者の
疼痛側と関節円板転位側は必ずしも一致しなかった。
患者本人の主観的評価に関節痛症、咀嚼筋痛が与える
影響は大きいと考えられた。

演題5 本学歯学部附属病院におけるエックス線CT
検査の臨床統計的考察
○近藤大輔、佐藤仁、東海林理、
星野正行、泉澤充、高橋徳明、
中里龍彦、江原茂、小豆崎正典、
坂巻公男
岩手医科大学歯学部歯科放射線学講座、
同放射線医学講座

目的：エックス線CT検査（CT）は頜口腔領域における
画像診断に広く用いられている。そこで今回、2001
年4月から2003年3月にかけてCTを行った120症例
について、また一部は2001年7月の岩手歯学会で発表
した2000年度の468症例も含めて臨床統計的に検討し
た。
結果：年度ごとの症例数では2000年度が468例、2001
年度が561例、2002年度が643例と増加傾向を示してい
た。診療科別では第一口腔科、第二口腔科、歯科
放射線科が多く、この3科で全体の約90%を占めてい
た。疾患別内訳では、全体としては上皮性悪性腫瘍
が最も多く、次いで頸頭部であった。
Dental MPRの検査件数は、歯学部のCT件数のうち
約30%を占めており増加傾向にあった。各科別の検
査件数では口腔外科および歯科放射線科の症例が多い
ものの、矯正歯科や口腔インプラント室も一定の割合
を占めていた。疾患別分類の内訳では、CT全体では
悪性腫瘍が多かったのに対して、Dental MPRではイン
プラントの術前検査や埋伏歯の検査が多く、骨顎炎
や頭頚部腫瘍の検査も増加傾向にあった。
考察：CT全体での疾患別の内訳では悪性腫瘍と顎頭
部の囊胞が多く、Dental MPRでは、それらに加えてイン
プラント、埋伏歯や歯列不整および顎頭の囊胞が多い
傾向であった。CT全体の件数が増加しているのは、
ヘルカルCT装置の更新による検査時間の短縮による
ものと考えられた。Dental MPR の件数が増加しているのは、これまでの CT では診断が難しかった症例に対しての Dental MPR の適用例が増加しているためと考えられた。

結論：本学歯学部附属病院における CT の件数は年々増加しており、口腔外科領域だけではなく、他の歯科領域においても、そのニーズが高まっていると考えられた。

演題 6. 顎関節外科外来の現状

○大平 明穂、佐藤 理恵、根反不二生、尾山 三郎
岩手医科大学歯学部口腔外科第一講座

目的：顎関節外科外来における患者の動向や紹介状況および治療内容を把握することを目的とする。

対象・方法：平成15年3月12日から6月30日に当外来を受診した顎関節疾患患者に対して行ったアンケートや外来で用いているプロトコールや当科のカルテを基に調査した。

結果：患者の性別は男性21例、女性55例で、平均年齢は男性34.5歳、女性36.6歳であった。患者住所は盛岡市34例が最多多かった。交通手段は、自家用車が39例と最も多く、来院までに要した時間は11〜30分と61〜120分が多くかった。紹介先の診断は顎関節症と顎関節症の疑いが多かった。当外来への紹介率は63.2%であった。

紹介先での治療はスプリットが最も多かった。主訴は顎の痛みが44例（37.9%）と最も多かった。当外来での診断は顎関節症56例が最多多く、顎関節症の症候分類では、Ⅲb型の20例（35.7%）が最も多かった。当外来での治療法は、薬物療法が15名と最も多かった。また、顎関節鏡を用いた治療（外科療法）は16例（28.6%）であった。

考察：当外来には他施設から紹介される患者の割合が多くかった。また、紹介先での診療（保存療法）に抵抗を示す、難治性の症例が紹介されることが比較的多かった。当外来では、新たに局所麻酔下（外来）で行える細部顎関節鏡システムを導入したことによって、従来よりも外科療法（顎関節鏡視下での治療）を行う割合が増えた。また、患者は懸念ある状態であるが当外来を受診する例が比較的多く、1 時間以上かけて当外来を受診する患者の割合が多くかった。

結論：本調査によって顎関節外科外来における患者の動向や紹介状況および治療内容を把握できた。

演題 7. 舌痛症患者の血液検査所見に関する検討

○瀬川 清、八木 正篤、斎村 知幸、太田 敏博、中島 崇樹、菅野 真人、松尾 正也、水城 春美
岩手医科大学歯学部口腔外科第二講座

目的：舌痛症の原因はまだ明確でない。一般に舌痛を生じる原因として全身的、精神的な要因、皮膚の変化、神経症などが考えられている。そこで今回は、舌痛症患者における血液検査のスクリーニングをどのように進めてゆくべきかの指針を得ることを目的として、舌痛症と診断した患者のうち血液検査施行例に関して検討した。

対象：1999年4月〜2003年3月までの舌痛症患者131例のうち血液検査を施行した71例（男性5例：平均年齢57.8歳、女性62例：平均年齢60.3歳）である。既往歴・合併疾患は、婦人科疾患（19例／31例）が最多多く、次に高血圧・心疾患（15例／23例）、胃腸疾患（15例／21例）、アレルギー性疾患（12例／19例）、肝疾患（8例／16例）などであった。

結果：血液一般検査では、貧血が7例認められ、血液化学検査では、低栄養状態の疑い例が59例中10例、肝機能検査値異常例が59例中19例、腎機能検査値異常例が57例中11例であった。また、ビタミン検査ではビタミンB2低値が23例中6例、ビタミンB6低値は27例中1例で、逆にB6が高値を示したのは14例で、ビタミンAや健康食品などの長期利用例であった。

考察および結論：今回のようなデータから舌痛症の原因を特定できた症例はなかったが、血液検査データに異常が認められる症例も多く、特にビタミンの血中濃度でビタミンB2低値あるいはビタミンB6高値を呈する症例が多いことから、今後症例を増やして、これら血液検査データと舌痛症との関連についてさらに検討する予定である。